子供の人格

同窓会に出かけるとき、懐かしく　当時にタイムスリップし、わくわくして出かけるのであるが、当時の生徒への言葉や態度が「上から目線で、接してはいなかったか？」また、「生徒の心を傷つける失礼はなかったか？」と気に掛かる。

教職に就いて二十年経った頃に目にした、我が家の子育てについての、「父に、『赤ちゃんは人格的存在』と啓発されてから、私は赤ちゃんというものにおおっぴらに敬意を払うようになった。」という村松英子さん（女優・詩人）の言葉は、強く心に残り、私の教育観は根底から揺らぎ、以降、生徒そして周囲の人たちへの接し方が大転換したように思っている。
「子供は、どのような存在か？」など、ゆっくり考えてみることがなかった自分にとって「真に、児童生徒を一人一人の人格として尊重してきたか？」「真に、児童・生徒を教育の手段としてではなく、目的自身として接してきたか？」と考える機会になった。
時には、真剣に叱った。その行動を、また、その生き方を、特に若いときは、強く指導した。しかし、その日の気分で叱ってはいなかったか、他への見せしめで叱ることはなかったかと自責の念に駆られることがある。
案の定、同窓会に出かけると、「先生に叱られた」「先生に叩かれた」の声が、あちこちから聞かれる。昨今のように、体罰が厳しく問われる時勢であれば、懲戒ものである。

既に退職、しかし、時に、先生方と接する機会がある。そんなとき、児童生徒や職場の仲間への言葉づかいや態度に、やけに高圧的なもの（上から目線）を感じ、眉をひそめることがある。
威張ることもない、ぺこぺこすることもない、「人と人との関係」、共にある「共感的関係」を保ちたいものである。